

バッドエンド後日談（体験版）.txt

バッドエンド後日談の体験版です。冒頭から2343文字まで読めます

ガドルスとフレシアが「恋人」として最後のセックスをしたあと…

「なあ…お前、学校って今、「休学届け」出してるんだよな。」

ショックを通り越し「無」になっているフレシアに、ガドルスがぼつりと言った。
フレシアは無気力に頷く。

「とりあえずお前、学校復学して卒業だけしとけよ。
明日から、アイウエオ村に向かって戻ろう、送るから。
今から向かえばちょうど新学期の4月に間に合うだろ…」

「それって、別れる、と言うか、そのままフェードアウトするってこと…？」

「いや…とりあえず1年離れて冷静になろうってこと。
1年後お前が卒業した頃に、またアイウエオ村に行くから。
その時どうするか話し合おう。」

「話し合う前に、もう今結論出てるんじゃない…1年後にこれ何か変わるの…？
ガドルスはそれで良くても、俺はどうしろってんだよ…
俺多分、兄にしか愛情を向けられない癖（へき）なんだ…
もう体の関係はなくていいから、でも一緒に居させて…」

「フレシア、もう今夜は寝よう。おやすみ。」

……

その翌日、本当にアイウエオ村に向かってふたりは歩き出した。
道中は完全に葬式会場への道のりで、会話は必要最低限以外ない。

当然夜は何もしないし、昼も一定の距離をあけていた。

もう兄（弟）をいやらしい目で見たり、触りたいと思う気持ちは、お互いなくなっていた。

……

そして4ヶ月後…

2月に、アイウエオ村に到着した。
学校の新学期が始まる2ヶ月前であった。

1年半ぶりの我が家に足を踏み入れる。
長い間の留守で家中あちあちこちほこりだらけだった。

水道も止めていたので、業者に連絡して再開してもらう。
ガドルスは大人しく、作業や掃除を手伝った。

フレリアは取り急ぎ学校に「復学届け」を提出した。

無事、新学期から、復学出来ることになった。
2つ下の下級生と同級生にならなければならないが…
ともかく宙ぶらりんになっていた最後の学生生活の1年を、また送れることになった。

その日の夕方…

「もう手伝うことは…ないみたいだな。
じゃ俺はこれからソロパーティで冒険者活動続けるから。
あ、お前との「パーティ解散届け」の提出は俺がしとくな。」

「うん、俺はとりあえず学校卒業するよ。
それからのことはこの1年でのんびり考える。」

「おう、そうしろ。あとフレリア…本当に悪かったな。
お前の初めての恋人で初めての相手が、こんなゴミ兄で本当に申し訳なかった。」

「こっちこそごめんね、こんなブラコンの気持ち悪い弟で…
俺的にはあなたに俺の初めての全てを捧げられて良かったと思ってる。
時間かけてどんどん吹っ切れる努力をするよ、お兄ちゃん。」

恋人としてもう終わった今、フレリアは素直に「お兄ちゃん」と言えるようになっていた。

「そうか、俺に言われたくないだろうけど、頑張ってくれ、な。
そんで、お前が学校を卒業した1年後の話だが…」

～いや…とりあえず1年離れて冷静になろうってこと。
1年後お前が卒業した頃に、またアイウエオ村に行くから。
その時どうするか話し合おう。～

最後にセックスをしたあとに、確かにガドルスはこう言った。
しかしこの流れだと1年後にどうするもへったくれもない。
もう別れたのに、1年後に話し合うことなどない。

「もう今結論出てるじゃん。お互い別れることに納得してるし。
だから1年後、わざわざ来ないでほしいんだ。」

フレイアは1年後の再会を、ハッキリ断った。

「そか…けどお兄ちゃんは今フレイアのこと弟として大好きだぞ。
お兄ちゃんではお前を幸せに出来ないから、誰か他人に任せることになるだろうけど。
お前がどうやったら幸せになるか真剣に考えてるんだ。」

「俺の事はいいからさ、自分が幸せになる方法でも考えてくれよ。」

「絶縁するんじゃないかってこれからは普通に兄弟として…無理かな？」

ガドルスは伺うように、フレイアに尋ねる。
どういう意図かは知らないが、ガドルスは兄弟としては縁を続けたらしい。

（そうは言っても俺らは普通の兄弟じゃないからなあ。
実の兄弟のくせに付き合っただけで、散々近親相姦しまくったあとに別れた、変態兄弟だから…
チヤチヤで繋がらずにキツパリ縁切りしたほうがいいんじゃない…）

とは思うが、フレイアには、それでも絶縁したいと言う勇気はなかった。

なんだかんだで、ガドルスとフレイアはこの世でたったひとりの兄弟、家族なのだ。
実の両親もガドルスの義両親も亡くなってると、親戚とかも居ないんだから…
ガドルスと完全に縁を切るなら、フレイアには家族がひとりも居ないことになる。
それはやっぱり寂しいし、怖いとすら思う。

「じゃ、絶縁はしないでいいか。
でも1年後に会う約束は、なかったことにしてほしいんだ。
そして今後はよほどのことがない限り、会うのはナシで、電話とメールだけでお願いしたい。」

フレイアは、絶縁しない代わりに、基本的に会わないことを提案した。
会わないなら、おかしなことにはなりようがないから。

「そうか、じゃさうしような。」

ガドルスはその提案をアッサリのんだ。

「雑談でも何でも、電話やメールくれよな。お兄ちゃんもするから…それじゃ、な。」

ガドルスは申し訳なさそうな顔でフレイアの頭を撫でると、背を向けた。

バッドエンド後日談（体験版）.txt

去って行くガドルスの後ろ姿を見送りながら、フレリアはホッとする。
喧嘩別れではなく穏便に別れられたことに、今更ながら安心していた。

これからは普通にたったひとりの家族として兄弟として付き合いが出来る、はず。
今後会うことがあるかは分からないが、電話やメールは普通にしていれば、寂しくない。

その日のうちに、アイウエオ村の村長に、帰ってきた報告をする。
村長は空気をよんでガドルスが兄フレッドだということを誰にも言わず伏せてくれていた。
「フレリアはひとりで旅立った」という設定にしてくれていたのだから、フレリアは恥をかかずに済んだ。